

## ミクロネシア・チューク諸島(トラック諸島)報告 2018年11月

大野正夫

ミクロネシア連邦は、西太平洋のカロリン諸島内に位置するサンゴ礁縁辺で囲まれた静穏海域である。人口は約12万人であり、ヤップ州、チューク州、ポンペイ州、コスラエ州の4州である。チューク州はチューク諸島であり、世界最大級の周囲200kmに及ぶ堡礁海域である。深い水深で6万トンの大和も全速走行ができた。そのなかに火山島群島々が存在するチューク諸島は、かつてトラック諸島と呼ばれ、連邦第二の人口である。国家収入は水産業(マグロ)、観光業、農業(ココナツ、タロイモ、バナナ等)である。チューク州の州都・ウェノ島(春島)に州の主な機能が集まっている。

チューク環礁に人類が辿り着いたのは西暦の紀元前だと考えられている。具体的なルーツははつきり解っていないが、現在のところ最も有力な説は、ソロモン諸島やビスマルク諸島方面からアウトリガー・カヌーに乗って北上してきた航海者たちがこの島々に住み着いたというものである。その後スペインの植民地となり、次いでドイツの植民地を経て、第一次世界大戦終結後の国際連盟決議で、日本の委任統治領となり、1922年に南洋庁の支庁が置かれ、民間人も多くなり、海軍基地整備が推進され戦略上の要衝となった。夏島には、日本連合艦隊、第4艦隊の司令部が置かれ、第二次世界大戦の敗戦まで日本の統治を継続した。夏島には水上機基地(滑走路がある)が設けられた。島々の各所には要塞砲が設置され、3万トンの重油保管タンク、4,000トンの航空燃料保管タンクが設置されていた。海軍料亭の支店もあり、将校の接待や会談にも使用された。環礁内は航空母艦が全速航行しながら艦上機を発艦させられるほどの広さがあり、大和や武藏の停泊地であった。散在する島々には日本語の名前が付けられていた。春島は、民間人が多く、物資補給地であった。その後はアメリカによる国連信託統治を経て、1986年にミクロネシア連邦国となった。

**トラック島空襲:**太平洋戦争中は、連合艦隊の主力艦船が停泊し、ラバウル航空基地を始めとする南方基地への中継地として航空移動の中心的な役割も果たしていた。1944年2月17日-18日にかけて、アメリカ軍機動部隊が実施した日本軍の拠点トラック島への攻撃であった。日本海軍はトラック泊地を絶対国防圏の拠点として重視していたが、暗号解読で大規模な米軍艦隊攻撃をキャッチし、大和や多くの海軍艦艇は、横須賀に退避したが、航空機、輸送艦の多くは撃沈された。その残骸がいまだ、春島から夏島の海域にあり、チューク州の法律で戦争遺跡として保存されており、ダイバーの良い潜水スポットになっている。

ウェノ島またはモエン島と呼ばれる春島はチューク州の中心地である。日本統治時代に作られた飛行場は、現在国際空港として使われている。

春島にあるトラック島空襲の慰靈塔



**森小弁(もり・こべん)物語:** 戦前の人気漫画のベストセラー『「冒険ダン吉」になった男 森小弁』(将口泰弘著)は、春島の酋長になった森小弁の 76 年の生涯を、事実に基づいて描いたものである。

森小弁は、1869(明治 2)年に土佐藩士の家に生まれた。当時日本政府が南洋貿易や移民で国力増強を図る南洋推進していた。小弁は「南洋で自由な社会をつくろう。食うに困った日本人を受け入れよう」と決意し貿易会社の船に乗り込んで、1 人で南太平洋のトラック諸島(現在はミクロネシア連邦チューク州)に上陸した。22 歳の時だった。トラック諸島は、腰巻のみで、顔と身体を彫青で飾った先住民が暮らす未開の土地だった。小弁は現地の生活に同化するよう努めながら、日本との貿易を切り開いた。小弁は春島のマヌッピス酋長のもとで働き酋長の信頼を得て、その長女イサベルと結婚する。勤勉、誠実な小弁はマヌッピスのあとの大酋長を継いだ。小弁は石鹼の原料となるコプラを日本に輸出し、衣料やランプなど日用品を輸入し、トラック諸島に初めて貨幣経済を持ち込んだ外国人となった。酋長となった小弁は島民の生活向上に努め、学校や病院などの建設に尽力した。偉大なリーダーとして、終生島民から慕われた。酋長となった小弁は 11 人の子をもうけた。現在、ミクロネシア連邦チューク州になっている春島には、直系だけで 1000 人以上の子孫がいるという。そして、2007 年にミクロネシア連邦の第 7 代大統領になったエマニュエル・モリは小弁のひ孫である。2008 年に高知市を訪れたモリ大統領は「かつて南洋に新天地を求めた日本人の開拓者の血が、わたしを含め多くの国民に流れている。われわれの誇りとして受け継がれている」と述べた。チューク州には森の性を名乗る人は 3000 人といわれ、同州の人口の約 10%を占めている

**海藻養殖の試験の実施:** 2018 年 11 月に、春島出身のロジャー S. 森公使と、高知在住で高知ミクロネシア交流協会の山本敦夫氏の発案で、海藻資源研究所(株)と共同事業として、海藻増粘剤カラギナン(寒天に類似した製品)の原料となる熱帯性紅藻のキリンサイの養殖試験を実施した。筆者は、彼等とともに種苗はミクロネシア政府からキリンサイ移植許可を得て、土佐湾で養殖が行われているキリンサイ種苗 10 kgほどを、発砲スチュロール箱に入れて、関西空港からほぼ 1 日間の渡航時間(ガム経由)で、春島に運び。沈没船が沖合に見える春島に移植開始をした。従来のロープに種苗を結びつける方法と網に入れる方法で行った。キリンサイ葉体の成長は順調であったが、台風で流されるなどして、種苗は森公使の住居の海域で、現在は保持していると聞く。

**夏島の視察:** 海藻養殖試験の移植した後に、生育観察期間があり、半日の夏島視察を行った。日本軍が撤退した後の夏島の状況はあまり報告されていない。我々は、波の穏やかな日を選んで、森公使が所有する高速艇で渡島した。春島から夏島は近くに見えるが、30 分ほどの時間が掛かった。夏島には、艦上飛行機用の短い滑走路が設置されたところがみえた、海岸に沿って水平に樹木が林立しており、滑走路跡と一目でわかった。島に上陸するコンクリート桟橋は少しヒビ割れがあったが、今でも十分に使える。陸上に上がった将官達が、ここから沖合の軍艦に乗り移ったのであろう。周辺も船が横付けできる岸壁になっていた。

コンクリート桟橋から一直線の広いコンクリート道路の向こうには、司令部の建物が昔のままにあった。木造でありペンキは塗り替えているようで、きれいであった。記念館として補修されて

いるのだろう。そこから細長い路が、こんもりとした木々の間に続いていた。コンクリート道はしつかとしていた。周囲の草木も適度に刈り取りが行われていた。島内には幾人かの家があり、この島の管理をしてしているようだ。少し小高くなった広い広場には、門柱と一棟の兵舎があつた。ここもペンキが塗り替えてあり記念館になっていた、

小高いところから見下ろすと、かなり広い草原があった。ここは、かつて旅館や花町などの住宅であったと言われた。別のところには、「森小平太上陸の」という石碑が立っていた。彼はこの島に上陸し、その後、人口の多い隣の島、春島に移ったのであろうか。

夏島は、観光スポットとして、きれいに管理されており、かつての日本海軍の重要拠点地がしのばれるところであった。島全体を公園のように管理がされてきたことに、ミクロネシア政府、チエーク州の思いが感じられた。

**ウエノ島(春島)の産業振興:**チエーク州の振興策は、中核地域の春島の道路整備と産業であると思う。現在までは観光の振興を重視してきたようである。国際線で来島した多くの観光客やダイバーは空港から、施設の整ったリゾート区域に、渡し船で直行してダイビングや海岸レジャーに楽しんでおり、華奢なカフェーレストランや宿舎が海上から見えた。

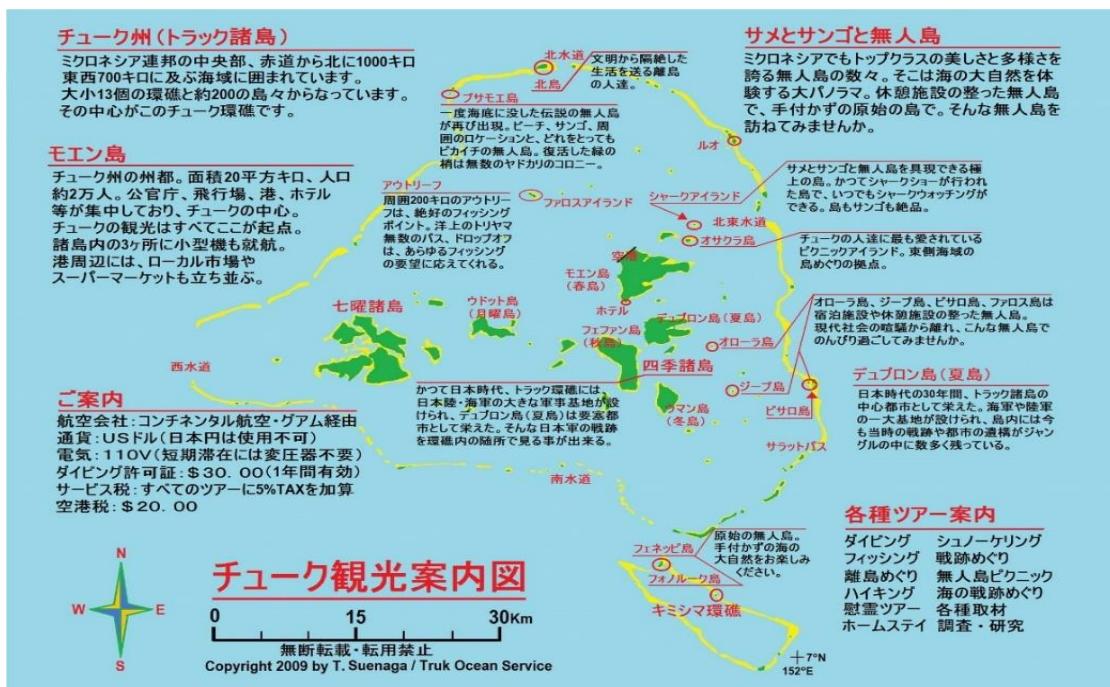
春島の中核街は、一本の広い道路の両側に商店やホテルが並び、その先は昔ながらの粗末な家屋であり、道路は、アスファルト整備も十分でないガタガタ道である。全島を車では走れると地図には書かれているが、半分まで自動車で行って引き返した。道が悪く通行止めであつた。滞在したホテル代が高いに驚いた。粗末な室内設備で、日本のビジネスホテル並みの価格であった。

気候は生活するには良く、多くの住人は漁業やタロイモやココナツ、バナナなどを栽培して得る収入で自給自足の生活に満足しているようである。しかし山本さんから、多くの公共施設や設備の維持は、米国の援助金で賄われていると聞いた。

今回は、海藻キリンサイ養殖して、外貨が得られるキリンサイ粉末の生産などを企画したが、コロナ禍もあり、この企画はストップしている。「文明国的生活が良い」と住民に押し付けることは賢明な施策でないかもしれないが、今の貧困とも言えるレベルから脱却して、生活基盤の向上と道路や通信網などの向上は必要であり、そのためには水産業と農業の振興が必要である観光業で得る日当が高いからかも知れないが、賃金が意外に高い。また働く意欲が低いことも感じられた。今回持ち込んだキリンサイ養殖事業は、生産されたキリンサイ粉末は、農業用肥料、魚類や家畜の餌にも加工できる。良質なものは輸出出来て外貨も得られる。これらは住民の生活向上に繋がる。現在は米国からなどの援助により州の財政が成り立っている。自立した財政を作るためには、地元に産業を興すことである。春島の人口 1 万人ほどの社会から、森小平太のような者が現れることを期待したい。

目下、ミクロネシアは観光産業に軸足を置いているようであるが、そこためには、道路の完備である。空港から渡し船で、リゾート区域に移動する方法では、島全体の振興には結び付かない。数日の滞在で、春島振興の将来像を書くはおこがましいが、「これまで良いのかな」という印象を持った。

火山島であり水量が十分であるのが、日本海軍の大部隊が停泊地にした理由である。チエーク州には、農業や水産業の振興には向いている地力がある。春島には高知県県民との血縁者多い。高知県としては、人口一万人の町起こしである。高知の人々が、ミクロネシアへの目を向けて、ミクロネシアの振興に関わればと良いと思う。



#### チエーク島の案内図(括弧内は旧名称)



## 日本軍海軍が停泊していた頃



## モエン島(春島)の国際空港



空襲のより春島の浅瀬に沈船した小型船



## 空襲により沈没した物資輸送船



コンクリートで作られた波頭桟橋（右山裾は滑走路跡）



波頭から指令部建物に続く道



駐屯地に続く道



駐屯兵舎の門柱と兵舎



過ぎた歳月が偲ばれる大き樹木



紅藻キリンサイ養殖試験開始